明治初期の系統解剖学書

島田　和幸

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ

〒890-8544　鹿児島市桜ケ丘8-35-1
099-275-6110
E-mail kshimada@dentc.hal.kagoshima-u.ac.jp

Ⅰ．はじめに

我が国の学問は幕末期から明治初期にかけてはオランダからの輸入による蘭学に始まりその後わずかの時期に，米・英・独・仏からの学問が輸入されることにより外国からの知識が入り乱れた時期となった。解剖学においても他の学問と同様の状態であった。このような混沌とした時期，即ち明治初期の解剖学書についての詳細な書誌学的な報告はこれまであまりなされていない。その理由としては明治初期からこのかた百年以上経過しているために書物が完全な状態で現存しているものが少ない。また現存していても多くは貴重本になり容易なる閲覧も出来ないのが現状である。

そこで今回私蔵する明治初期のいく種かの解剖書についてそれらの記載内容などを紹介して現在の解剖書に至るまでの経過の一端を考察してみることとする。

Ⅱ．解剖書紹介

宝暦4年（1754年）2月7日，京都西郊の刑場にて処刑された嘉右衛門（俗に屈嘉）の屍体が当時の京都所司代酒井忠則の許可のもとに山脇東洋，同志門人達により解剖観察され，宝暦8年（1758年）12月には「蔵志」[1] 乾坤二巻として発刊された。（図1）この書物は観察という事実にもとずく日本の始めての科学的な形の書物であることは意義が深い。

その後，明和8年（1771年）3月4日に江戸千住小塚原の刑場で老婆の腑分観察を行った前野良沢，杉田玄白，中河淳庵らの蘭医によりオランダ語解剖書 Johan Kulmus の Tabula Anatomica（1731年）がその後4年の歳月を経て翻訳され完成される。この書こそが「解體新書」[2] として後生にまで残る近代日本医学の原点ともなる書物となる。「蔵志」，「解體新書」などの実際の解剖体の観察により西洋の解剖学の記載や図のすばらしさを認識されたのは幕末から明治の初期の頃であり，この時期よりこれまでの中国系の医学から西洋医学へと日本の解剖学はすさまじい変化をきたすようになる。この様な混沌とした時期を医学史研

図1　山脇東洋の「蔵志」

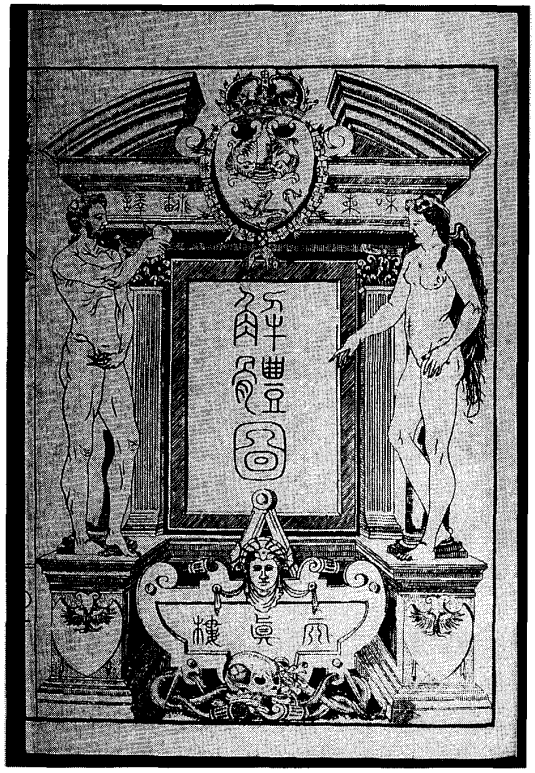

図2　解體新書の表紙

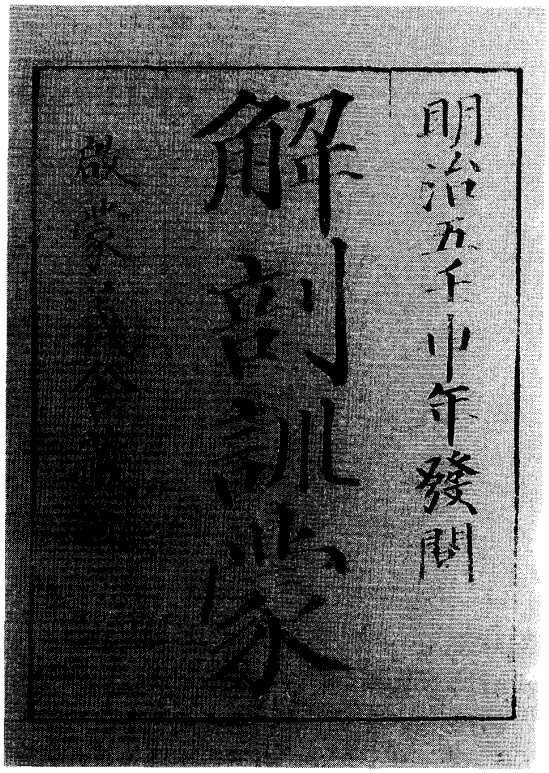

図3　解剖訓蒙の表紙

究家である阿知波[3]は大きく四つの時期に分類している。彼によるとこれらの時期とは

1）ドイツ解剖書の蘭訳書を輸入していた時期（1840年以降）
2）直接ドイツ解剖書を輸入し，原著と先に輸入したその蘭訳書とを比較しつつドイツ医学を受容した時期（1850年～1870年頃）
3）英・米からの解剖書がいちどに入ってきた時期（1865～1880年頃）
4）ドイツ解剖書の優秀性が認識されわが国の医学界にドイツ医学書が定着した時期（1887年以降）

である。この中でもとくに第3期（1865年から1880年頃）に今日の解剖学教書の原点ともいえるような多くの英・米国の解剖書からの翻訳書が出版されている。そして，これらの書物名は現在の解剖教科書[4]や医学史[8,9]の中でもよく出典されているが実際それらの書物の詳述な記載内容となると皆無である。そこで今回は，明治時代に医学生に多く使用されすでに歴史的な書になってしまったこれらの解剖教書について紹介していく。なお当時としては代表的な解剖書ばかりではあるが紹介にかたよりがあることをおゆるし願いたい。

①　解剖訓蒙（図3）

本書は明治5年（1872）3月から明治9年（1876）1月にわたり啓蒙義舎蔵版より全20巻揃いで出版された。当時の価格にして3圓2分10朱で大阪の佐々木吉良，浅井吉兵衛，松村九兵衛らの書店を通じて販売された書物である。大阪の松村矩明（当時文部少教授）を中心とした安藤正胤，副島之純，村治重厚，横井信之，中泉正らの6名により米国ペンシルバニア大学の Joseph Leidy による原著名「An Elementary Treatise on Human Anatomy」の部分翻訳である。本書は袋綴本で表紙はブルー色，四針眼，用箋は楮紙の形式をとり大きさは縦225×横152㎜である。なおこの書物の内容については第1巻の目録箇所を見てみると，第一篇　骨論，第二篇　関節靱帯論，第三篇　筋論，第四篇　栄養器論（口腔，咽頭，胃管，胃，腸，膵，肝，脾），第五篇　脈管論（心臓，動脈，静脈，水脈），第六篇　呼吸器論（咽頭，気管，肺臓，付属腺），第七篇　泌尿器論（腎臓，副腎，膀胱，尿道），第八篇　生殖器論（睾丸，陰茎，精嚢，付属腺，子宮，卵巣，膣，外陰部，乳房），第九篇　神経論（脳，脊髄，神経），第十篇　五官論（視官，臭官，聴官，味官，觸官），第十一篇　組織論（骨，軟骨，筋，神経，諸膜，諸腺，歯牙等ノ組織及ヒ繊維，弾力性，繊維軟骨，脂肪等ノ組織）の十一篇系より本書は構成されている。さらなる詳細は島田[5]がすでに報告している。

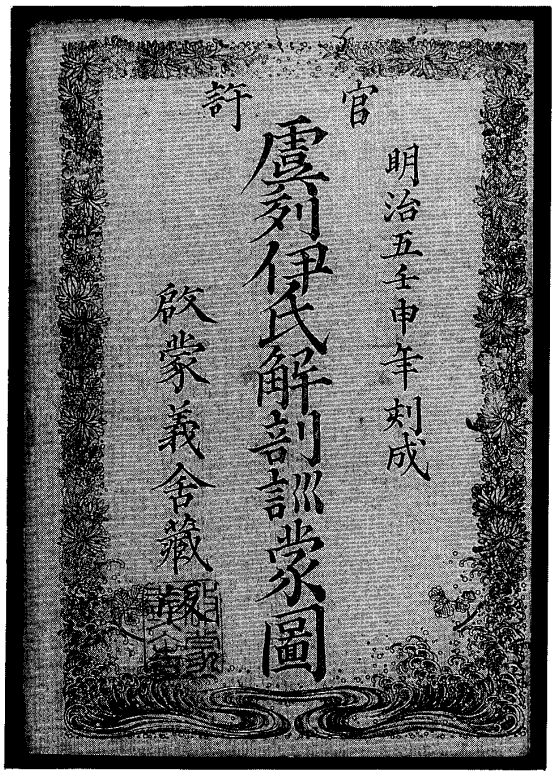

図4　眞列伊氏解剖訓蒙図の表紙

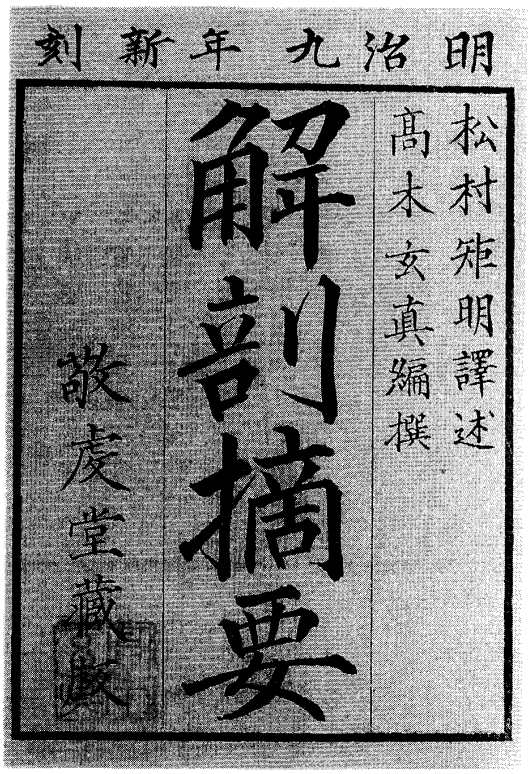

図5　解剖摘要の表紙

② 眞列伊氏解剖訓蒙図（図4）

本書はHenry Gray（1828～1861）の著書による「Anatomy, Descriptive and Surgical」Philadelphia. Blanchard and Lea出版（1862）の各部位の図とその用語とを翻訳してまとめた図譜書であり全2巻より構成されている啓蒙義舎蔵版賣弘所より明治5年（1872）に出版された。

第1巻は頭部の骨図より始まり下腿筋まで全45ページより構成されている。第2巻は46ページの縦断鼻腔口内咽頭図より始まり，脈管系，呼吸器系，泌尿生殖器系，神経系，感覚器系へとすすみ全99ページの図にて終了する左右両開きの図譜書であり，大阪の松村九兵衛により発売されているが当時の価格については記載がなく不明である。なおOriginalの本書の装丁については今日は前所有者が再装丁しているために述べることができない。

③ 解剖摘要（図5）

本書は明治8年（1875）10月23日板權免許を得て同9年（1876）6月2日出版され，当時の価格は1円50銭であった。本書は米国ペンシルバニア大学のニールとスミスの解剖書（1869年版）の部分翻訳とされている。石川縣下士旗の松村矩明が譯者となり大阪の高木玄真が編撰出板人となり出版された。本書は全7巻より構成され，その装丁は袋綴本で表紙はブルー色，四針眼，用箋は楮紙で，大きさは縦220㎜×横152㎜である。内容は第1巻（骨論上）は脊椎骨より始まり下顎骨まで各骨の骨学概論を全29ページわたり述べられている。第2巻（骨論下）は　頭部の骨についての総論より始まり上肢，前腕，指骨，下肢，下腿骨，足骨について述べている。この構成には全26ページが当てられている。第3巻（靱帯論　筋論上）は関節論即靱帯より始まり足の靱帯論について述べさらに歯牙，表皮，毛髪，皮脂腺など消化器器官の一部と感覚器および頭頚部以外の筋について足の部位に至るまで全34ページにわたり述べられている。第5巻（消化器篇）は内臓，消化器に始まり腎臓，膀胱などの泌尿生殖器系について全43ページにわたり述べられている。第6巻（呼吸器及血管篇）は呼吸及血運器についてとくに今日での胸部内臓器官が記されていると同時に静脈系についても記されており全43ページにわたっている。最後の第7巻（神経系続編，五官論）は中枢神経と末梢神経及び現在の感覚器器官についての記述であり全44ページにわたっている。

なお本書の中には図は記されていないため同時に解剖摘要図完（図6）を敬虔堂蔵版にて出版されている。本書は全55ページより構成された左右両開きの図譜で

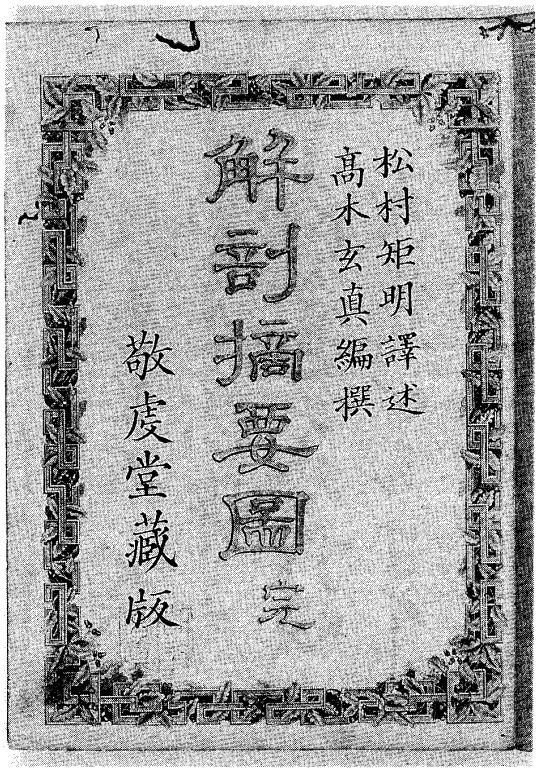

図6　解剖摘要図完の表紙

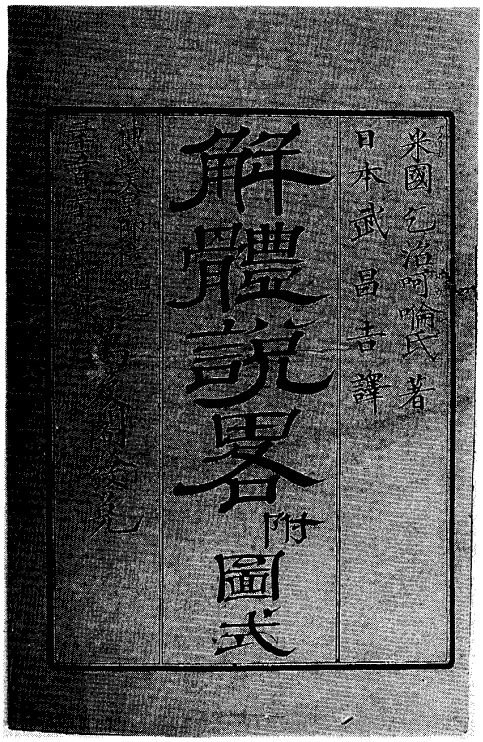

図7　解體説略の表紙

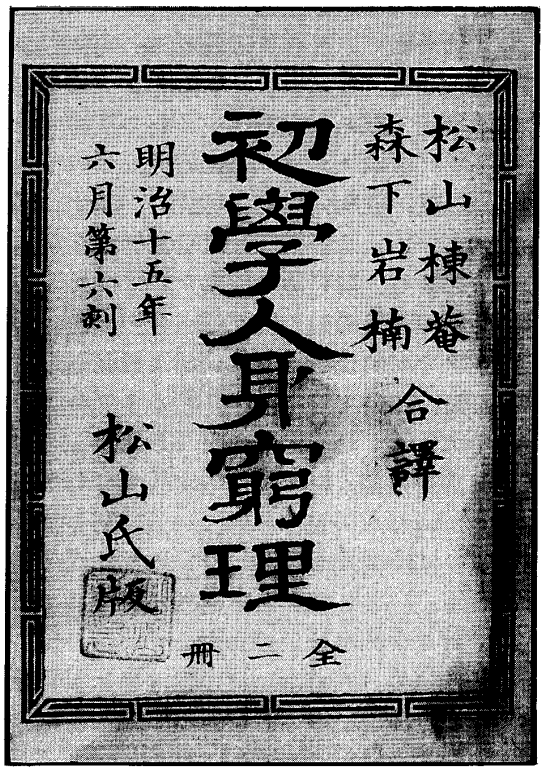

図8　初学人体窮理の表紙

眞列伊氏解剖訓蒙図に似た形式である。

④　解體説略（図7）

本書は米国の Henry Hartshorne「A Conspectus of the Medical Science」シリーズ7冊の中の一部からの翻訳であり明治6年（1873）に萬笈閣發兌にて出版された全巻3冊本であり，当時の価格は87銭5厘であった。その3冊のうちわけは巻1，2は本文内容説明であり，第3巻は図譜のみから構成されている。袋綴本で表紙はブラック色，四針眼，用紙は楮紙で，大きさは縦225㎜×横152㎜である。その内容は第1巻は骨学総論に始まり骨組織，脊椎，頭骨，顔面骨及び頭部についての総論から舌骨までを全27ページにまとめている。第2巻は胸郭，骨盤，上肢骨，下肢骨，歯牙，関節論及び各部の関節説明が全39ページにわたり述べられている。第3巻はこの第1，2巻で説明された箇所の図の説明にあたっており「解體説略図式，1，2」というタイトルになっており，その内容としては全身骨格図に始まり全部で36図からなっている。この書は骨および筋についての記載のみで消化器，循環器，神経系についての記載はいっさいなされていない。たぶんシリーズの中で全体の部分の翻訳がされずに終了してしまったものと思える。

⑤　初学人身窮理（図8）

明治6年（1873）3月に慶應義塾の松山棟庵，森下

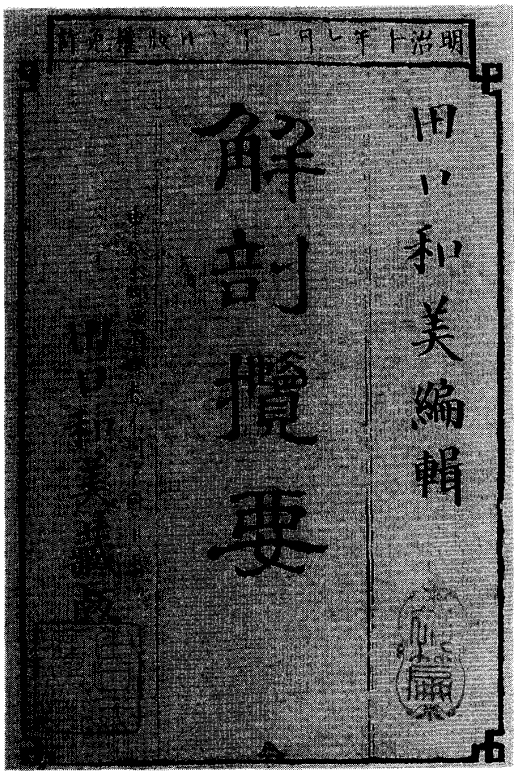

図９　解剖攬要の表紙

図10 華氏解剖摘要図の表紙

岩楠により米国のカットの書の一部を翻訳し，慶應義塾出版社より発行された書である。本書は人体解剖の概略とそれら器官の生理作用について一般向けにやさしく述べられた書物で全２巻より構成されている。内容的な記載からみて，この書物は医学生向きではなく一般の人々を対象とした人体を知るうえでの啓蒙書である。上巻は骨，肉，歯，消化，循環，リンパ系，分泌，栄養，呼吸，体温についてこれらのことがらについてやさしく述べられている。下巻には音の出る器官，皮膚，神経，五官（感覚器），健康法，病気にならないため，看護人の心得などが記されている。上巻55ページ，下巻40ページより構成され，下巻の最後には全身骨格図が１ページ付加されている。本は袋綴本で表紙はバイオレット色，四針眼，用紙は楮紙で大きさは縦223㎜×横148㎜である。

⑥　解剖攬要（図９）

本書は今日の解剖学会の初代会頭であり東京大学医学部解剖学教室の初代教授（明治９年６月）でもあった田口和美が独英の解剖書を参考にしつつ書かれた日本人による初の解剖書であり全13巻14冊よりなり全1042ページにのぼる膨大な書物である。

本書は田口和美蔵板にて明治10年（1877）７月26日版權免許をとり明治14年（1881）７月10日出版されていて，陸軍本病院，海軍本病院，東京大学醫學部，東京府病院等から官版御用所の許可を得た書物である。内容は第１巻は骨学特に軀幹骨としての脊椎，胸骨，肋骨，胸郭，舌骨などについて記されている。第２巻は頭骨，頭蓋骨，顔面骨，鼻腔，眼窠，口腔，顳顬窩，蝴蝶顎骨窩，翼状口蓋窩についてである。第３巻は四肢骨，下肢骨，骨盤，足骨について，第４巻は靱帯顎であり幹靱帯，四肢靱帯（上肢，下肢）についての詳述である。第５巻は筋学であり第一章として軀幹筋であり背筋，腹筋，胸筋，頸筋及頭筋，頭筋膜についての記述である。第６巻は第二章として四肢筋についてでありこれをさらに上肢筋，下肢筋にわけて述べている。第７巻は第四篇内臓学であり第一章は消食器（消化器），第二章は呼吸器について各器官の説明が記されている。第８巻は第三章として溺器（現在の泌尿器系）について述べられ，第四章は男女の生殖器系について，第五章は血管腺（現在の内分泌器官）について記されている。第９巻は第六章として五官器（感覚器）についてでありまず，觸器（皮膚器官），視器（視器），聴器，嗅器，味器について述べられている。第10巻は第五篇脉管學であり，第一章に心臓，第二章に動脉，胸部大動脉幹の枝について述べられている。第11巻は動脉の腹部大動脉幹に始まり，第三章は静脉，第四章

図11　海都満氏原図山崎元脩模寫解剖図の表紙

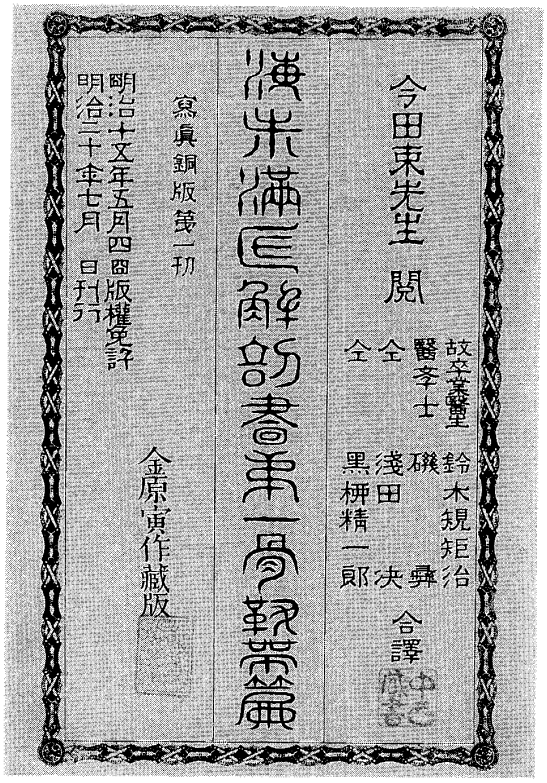

図12　海朱満人解剖書の表紙

は淋巴管について詳述している。第12巻は第六篇神経學で第一章は脳脊髄，神経系統／中樞部について脊髄，脳髄，脊髄及脳髄被膜について述べられている。第13巻上は第二章脳脊髄神経系統の末梢部，12対の脳髄神経についての記載である。最後の13巻下は脊髄神経と第三章の交感神経統についての記載である。本書の以前の書物との大きな違いとしては解剖用語にはすべてラテン名が加えられたことである。本書の装丁は縦185㎜×横125㎜厚さ（全13巻14冊）にて，袋綴本で表紙はブルー色，四針眼で用箋は楮紙よりなっている。

⑦　華氏解剖摘要図（図10）

本書はH. Hartshorneの「A Conceptus of Medical Sciences」（1824年版）の翻訳書で華氏解剖摘要の図譜として明治10年（1877）4月17日版権免許を取得後同年10月30日に村上典表により翻訳され大阪の松邨九兵衛により出版された縦187㎜×横123㎜，総82ページよりなる洋装版で二百二十八図が画かれているコンパクトな解剖図譜である。

⑧　海都満氏原図，山崎元脩模寫解剖圖（図11）

本書は明治13年（1880年）3月から明治17年（1884年）7月にわたり吐鳳堂書店，英蘭堂書店より発賣された日本人による最初の模写の解剖図である。洋装装丁本で全502ページよりなっている。本図譜のKarl Heitzmanの「Die descriptive und topographische Anatomie des Menschen」2 Bde. 1870 Wienである。

本書の図は原著の中からの図を模写されたものであるが残念ながら原著の図とともに記載されている説明については本書には記載がない。

⑨　海朱満人解剖書（図12）

本書は当時東京大學解剖学教室の助教授であった今田東が校閲し，鈴木規矩治，磯彝，淺田決，黒柳精一郎の四名により翻訳された図譜であり，山崎が模写した海都満氏解剖図と同じKarl Heitzmanの書である。明治15年（1882年）5月4日版權免許を取得，明治20年（1887年）7月金原寅作蔵版にて発行された洋装装丁の260ページ600図からなる図譜書であるが前述の書との大きな違いはオリジナルの図についている説明文についても訳されて，より図が理解されやすいようになっていて原著に近い翻訳書になっていることである。

Ⅲ．おわりに

書誌学的に明治の解剖学書を見てみると明治の初期頃には蘭学書からいっきに英米書の解剖書の輸入となり翻訳書のほとんどが英独書の解剖書の翻訳にとってかわっている。この中でもとくに英語圏の解剖書では

現在も多く使用されている Gray's Anatomy があげられる。当時米国の医学の中心であったフィラデルフィアを中心に出版された英語の医学書がこの当時解剖学以外でも多く翻訳されたことは注目にあたいすることである。

一方明治4年（1871年）から東京大學を中心にドイツからのおかかえ教師の来日によりドイツ医学の定着へと進んでいく中で明治10年前後は英語系の医学が，ドイツ系と同時に輸入されて一時期は混沌とした。その時に今回紹介した様な解剖書がぞくぞくと出版されているがその後，東京を中心とした医学はドイツ語系に定着されてくるにしたがって解剖書はすべてドイツ系のスタイルへとかわっていく。そのはしりとなるのが田口が著した「解剖攬要」であり，また図譜では「海朱満人体解剖」である。その後現在にいたるまで解剖書はドイツ系の様式にそった分冊スタイルの教科書[9]が主流となり今日に至っている。

謝辞

稿を終わるにあたり原稿のワープロ打ち込み，整理ならびに写真作成などの作業をしていただいた口腔解剖第二講座の事務和田フミ子，技官福重和人の両氏にお礼申し上げます。

参考文献

1）山脇東洋：復刻版「蔵志」．医学古典刊行会，大阪，1968
2）杉田玄白，中川淳庵，石川玄常，桂川甫周：復刻版「解體新書」．講談社，東京，1973
3）阿知波五郎：幕末明治初期（1840-1887）解剖学書（内，外）目録について－とくに19世紀欧米解剖学書目録とその蘭訳書と和訳書との関係－，日本医史学雑誌，22，215-236，1976
4）阿知波五郎：近代日本の医学－西洋医学受容の軌跡　Ⅲ．解剖学書誌からみた幕末明治初期の混沌期，358-382，思文閣出版，京都，1982
5）島田和幸：明治初期の系統解剖学書 1.『解剖訓蒙』について，形態科学，2，5-8，1997
6）松山陸郎：第五編　先生の文章と演説，97-134，松山病院，東京，1943
7）東京大学医学部創立百年記念会：東京大学医学部百年史，333-340，東京大学出版，東京，1967
8）小川鼎三：日本医学の発達，解剖学発達の回顧，成田武二編，13-31，日新医学社，東京，1956
9）金子丑之助：日本人体解剖学，第1巻，14，南山堂，東京，1968